

第12回 記者懇談会・実施要項

1 日時 平成10年7月16日(木) 15:00

2 場所 100周年記念会館 第2会議室

3 内容

(1) 若手研究者の研究テーマとその成果の中間発表 [15:00~15:30]

・久保田 賢一 総合情報学部教授
研究テーマ「通信衛星、ネットワークを活用した遠隔・協同学習に関する研究」 (資料1)

・大矢 裕一 工学部助教授
研究テーマ「高分子を運び手として制癌剤を癌細胞に集中的に運ぶ」 (資料2)

(2) 学内情報 [15:30~16:00]

① 第2部の入試改革について (資料3)

② ソルボンヌ大学との交流協定について (資料4)

③ 国際シンポジウムについて (資料5)

(3) 情報交換 [16:00~16:30]

4 関西大学の出席者

石川 啓 (学長)	岩村 護 (企画室長)
浦上 忠 (教学部長代理)	名劔 秀夫 (入試部次長)
久保田 賢一 (総合情報学部教授)	岡田 弘行 (入試課長)
大矢 裕一 (工学部助教授)	中尾 正司 (第二部事務長)
	荒木 紀忠 (広報課長)

5 配布資料

- ① 『生涯学習ガイド'98』
- ② 津川正幸(関西大学名誉教授)著『近世日本海運の諸問題』
- ③ 『関西大学通信』 第264号・第265号

以上

通信衛星、ネットワークを活用した遠隔・協同学習に関する研究

久保田賢一

関西大学総合情報学部

18歳人口が減少する中、多くの大学において社会人や主婦など新しい層の学生を受け入れるようになってきました。ところが、従来型の大学の講義である一方的な知識注入型の授業形態では、多様な学生のニーズに応えられないだけでなく、情報社会のニーズにも対応できなくなりつつあります。これからの高等教育のあり方を展望するならば、マルチメディアやネットワークを活用した分かりやすい授業、多様な学生のニーズに応える遠隔授業、ネットワークなどを通じて学生同士が協同学習できる環境の構築など、テクノロジーを活用したあたらしい教育方法を取り入れる必要があります。しかしながら、テクノロジーを活用したこれらの教育方法は、実験的に行われている段階で、長期的な視野に立った研究はまだ十分に行われていません。

このような問題意識のもとに、通信衛星・インターネット・公衆電話回線などのテクノロジーを積極的に活用し、高等教育の中でどのように活用できるか、新しい教育方法の可能性と問題点について実証的に研究を行っています。それは、単なる実験ではなく、日々の教育実践としてどのように利用が出来るか、さらに、教員、学生がこのような学習環境のもとでメディア・リテラシーをどのように身につけていくか、そのプロセスを研究することで、メディア・リテラシーについて効果的な教育方法を検討しています。



くぼた けんいち
久保田 賢一

教授

神奈川県横浜市生まれ。1973年に中央大学卒業後、静岡県で高校教師。80年に青年海外協力隊に参加し、フィリピン工科大学で物理を担当。その後、国際協力の仕事でアルジェリア、ベトナム、タイ、フィリピン、メキシコ等へ出かける。国内では、沖縄で海外からの研修員を受け入れ視聴覚メディアに関する研修コースを運営。89年よりアメリカ、インディアナ大学で視聴覚センターの연구원として教育環境の開発研究に従事。91年インディアナ大学でPh.D.取得後、関西大学情報処理センターで勤務され、学部開設と同時に助教授に就任。専門演習では、「グローバル・イシュー（地球村の課題）とコミュニケーション」をテーマに、国際開発、リテラシー（識字）、ジェンダー（社会的性差）、環境など地球全体に関わる問題の中でメディアとコミュニケーションの果たす役割について学生とともに研究。

高分子を運び手として制癌剤を癌細胞に集中的に運ぶ

関西大学工学部応用化学科助教授 大矢裕一

シスプラチンと呼ばれる白金化合物は、現在臨床使用されている制癌剤の中でも最高ランクの強い制癌活性を示すが、静脈投与した場合、血中に長く留まることなく腎臓へ集積したのち、尿中に排泄されやすく、腎障害という強い副作用をもたらす。さらには、血液中に含まれる成分と反応すると活性を失う性質があり、実際には投与したうちのわずかな量しか有効に働かない。腎臓での排泄は分子の大きさによって選別されるため、分子サイズを大きくすることで回避可能である。そこで我々は、体内で分解される無毒な高分子にシスプラチンをキレート型配位結合という特殊な結合方法で結合させ、見かけの分子サイズを大きくし、腎臓への集積を押さえて体内に留まる期間を著しく延長させることに成功した。同時にキレート型配位結合で高分子に結合させたことにより血液成分に対する抵抗性も向上しており、それらの結果として、癌組織での有効な薬物濃度が高まり、動物実験においてシスプラチンを上回る優れた制癌活性を示すことが明らかとなった。



おおや ゆういち
大矢 裕一

助教授

大阪生まれ大阪育ちの根っからの関西人。1989年京都大学大学院工学研究科博士前期課程修了後、本学の助手に着任。93年京都大学博士（工学）取得。専任講師を経て98年より助教授。専門は機能性高分子化学であるが、広く医学・薬学・生化学・細胞生物学・超分子化学・光化学などの境界領域での研究を展開されている。本学では、大内教授と共に、制癌剤などのドラッグデリバリーシステムの開発や医療用生分解性高分子の合成などバイオ機能性材料の分子設計に従事してこられた。最近では、96年4月-97年3月の1ケ年間、米国テキサス大学のProf. Sessler研究室に留学された成果を生かした超分子組織体の構築にも精力的に取り組んでおられる。高校時代にはバレーボール部の主将を務めたスポーツマンであり、恒例のソフトボール大会でも中心選手として御活躍であるが、最近では御多忙のため活躍の機会が少なくなったと嘆いておられる。